

高温に負けない「京式部」栽培技術の開発に向けて

「京式部」は、京都府が農研機構と共同開発した京都府オリジナルの水稻品種です。コシヒカリに比べて暑さに強く、香りの良さや白く艶やかな外観、上品な甘みが特長で、京都府のブランド米として生産が広がっています。

しかし、近年は夏の高温化が進み、収量や品質の低下が課題となっています。そこで当センターでは、夏の高温化に対応した栽培技術の開発に取り組んでいます。

現在、水田で田植え時期や植え付け密度、肥料の与え方を変えた栽培試験を実施するとともに、ビニルハウスで高温条件を作り、そこでポット栽培した「京式部」の生育や品質の変化を詳しく調べています。

これらの研究を通じて、気温が高い年でも安定しておいしい「京式部」を生産できる栽培技術の確立を目指しています。



ポット栽培した「京式部」をビニルハウスで高温処理し、調査しています。

スマホによる原木強度選別を製材工場で実証！

京都府では、公共建築物等の木造・木質化を推進しており、これら建築物に使用する、強度が明確な JAS 材の安定供給が求められています。

当センターでは、スマートフォンで丸太の強度を簡易に推定し、製材前に JAS 材向け丸太を選別する技術開発に取り組んでおり、今年度は、この技術を実際の製材工場で活用する実証試験を実施しています。

今回、スギ丸太の強度を測定して選別し、製材・乾燥後の JAS 格付結果を調査したところ、既存の製材工程に大きな支障を与えず実施できることが確認できました。

今後、丸太の強度と JAS 格付結果との関係や、丸太の強度情報の活用による丸太調達や製材計画の改善効果を分析するとともに、現場での測定作業に要する負担を評価し、JAS 材の安定供給を進めるため、生産現場向けの普及資料を作成します。



丸太の強度測定とマーキングの様子
(丸太を叩いた時の振動をから推定した強度をもとに、木口に強度区分を記載し、選別します)



強度選別した丸太の製材
(製材・乾燥後にJAS格付を行い、結果を確認します)

紙マルチを活用したキャベツ栽培試験を開始

丹後国営開発農地の秋冬どりキャベツ栽培では、定植前に透明マルチを利用した太陽熱処理による雑草防除が行われています。しかし、近年は使用後のプラスチック資材の処理が生産者の負担となっています。また、夏季の高温化による生育や品質への影響も懸念されています。

そこで当所では、京都府みどりトータルサポートチーム活動の一環として、使用後の処理が不要な紙マルチによる地温抑制効果を検証する試験を開始し、7 月 30 日にキャベツ苗を無被覆区および紙マルチ区に定植しました。

今後は、地温や生育の推移、収量および品質等経営評価を実施し、高温対策と環境負荷低減を両立する栽培技術の確立を目指します。



紙マルチの敷設



定植作業

「夏休み自由研究プロジェクト」を開催

府内小学生を対象にした、お茶がテーマの研究体験企画「夏休み自由研究プロジェクト」を 7 月 30 日に開催しました。15 組 38 名の参加があり、参加者は研究所の概要説明を受け、オープンラボや製茶工場の見学を行った後、2 班に分かれて「茶園にいる虫の観察」、又は「お茶の品質鑑定・成分分析」を体験しました。

虫の観察では、茶園で自分で採集した様々な昆虫を研究員の指導のもと顕微鏡で観察し、生き物の精巧なつくりを学びました。また、お茶の品質鑑定・成分分析では、水出し緑茶の飲み比べや成分分析を通じて、茶種ごとの味の違いと成分との関係を学びました。

参加者からは、「今回をきっかけに茶業研究所の存在を知った」「社会科で学習した宇治茶についてさらに学ぶことができた」といった感想が聞かれました。

当所では、今後も宇治茶の魅力を発信し、宇治茶への理解を深めるとともに、宇治茶ファンを増やす取組を進めていきます。



水出し緑茶の飲み比べを行う参加者



実体顕微鏡で昆虫の観察を行う参加

京都府茶品評会の運営を支援

府内産茶の品質向上を目的として、「第 44 回京都府茶品評会審査会」が 7 月 7 日及び 8 日に宇治茶会館で開催されました。出品茶 240 点について、煎茶、かぶせ茶、玉露、てん茶の 4 部門に分かれ、外観(見た目)と内質(香り、浸出液の色、味など)の審査が行われました。

当所職員は審査員として審査を担当するとともに、審査補助員として円滑な運営を支援しました。中でも審査の記録・集計はミスが許されない重要な役割ですが、迅速化とヒューマンエラー解消を目的に、当所が構築した茶品評会記録集計システムを活用しています。

本審査会で確認された茶の栽培や製造における改善点は、関係機関を通じて出品者にお伝えするとともに、地域で開催される求評会などの場において、品質向上の支援に活用されます。



外観の審査を行う審査員



内質の審査を行う審査員

耕作放棄地を活用した自給飼料生産の取組を開始しました

近年、全国的に耕作放棄地の増加が問題となっています。京都府においても耕作放棄地が見受けられ、景観を損ねるだけでなく、野生動物の潜伏場所となることも懸念されています。

そこで当センターでは、本年度から、耕作放棄地を簡易な方法で管理しつつ、そこで生育する野草を家畜飼料として活用するための試験を開始しました。

今月は、ススキの大株が優占する耕作放棄地において植生調査を実施しました。今後は、休眠期前の秋の時期に根茎から刈り払うことでススキの繁茂を抑制し、家畜飼料として有望なチガヤやチカラシバを主体とした野草地への転換を目指します。



耕作放棄地での植生調査

京都の海や水産業への理解促進のため施設公開を開催

7 月 29 日(水)に、当センター・水産事務所と、近隣の水産研究・教育機構、京都府水産振興事業団の共催により施設公開を実施しました。

「魚拓」づくり、「海藻おしば」づくり、「貝殻アクセサリー」づくり、調査船「平安丸」・漁業巡視艇「らくよう」の船内見学、ロープワーク体験などの体験メニューを準備しました。

猛暑の中でしたが、昨年を大きく上回る 180 名程度の来場があり、職員(海の民学舎生含む。)の説明・指導を受けて、楽しみながら熱心に体験に取り組む子供たちの姿が見られました。

魚離れや海離れが進む中、子供たちや保護者の方々に、普段できない体験を通じて、京都の海や水産業を少しでも身近に感じてもらう機会になりました。



左上:「魚拓」づくり、右上:「海藻おしば」づくり、左下:「平安丸」船内見学
右下:ロープワーク体験(海の民学舎生による指導)

農林水産技術センター評議委員会を開催しました

7 月 28 日、キャンパスプラザ京都において「令和 8 年度京都府農林水産技術センター評議委員会」を開催しました。

評議委員会では、令和 9 年度新規研究課題の重点化方針や令和 7 年度終了課題の成果及びフォローアップ調査結果について報告し、評議委員からご助言をいただきました。評議委員からは、研究成果の社会実装や現場で活用しやすい技術開発を意識した研究の推進、現場ニーズへの迅速な対応、産学官連携の強化などが重要であるとの意見が寄せられました。

今後も、評議委員会でいただいた意見や助言を研究活動に反映し、現場ニーズや社会情勢を踏まえた適切な方向性のもと、農林水産業の課題解決につながる研究開発と成果の普及に取り組んでまいります。



評議委員会の様子